

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある中学三年生の話です。この学校では、毎年五月に修学旅行に出かけることになっていますが、最近の生徒たちにはすこぶる評判が悪いそうです。四月のクラス替えの後、まだ人間関係がで上がる前に昼夜の行動を共にするのは非常に辛いというのです。かつて、修学旅行は、友人関係を深める a セツコウの機会でしたが、いまはお互いに口をきくのにさえ緊張してしまうといえます。クラス替えの後しばらくは学校へ行きたくないという生徒も増えているそうです。

このような最近の状況を解説して、子どもたちのコミュニケーション能力が劣ってきていると批判する言説は多いようです。しかし、彼らのまなざしが基本的に内を向いており、そのために各自の関心対象がばらばらになってきているとすれば、このような最近の状況は彼らのコミュニケーション能力の低下を示しているというよりも、むしろ ① 彼らのコミュニケーション環境がそれだけ困難なものへと変質していることを物語っているというべきではないでしょうか。

過去を振り返ってみても、かつての若者たちが、現在の若者よりも高いコミュニケーション能力をもっていたという証拠はどこにもありません。もともと日本には、お互いの対立を認めあつた上でその解決をめざすという文化は b シントウしておらず、むしろ対立そのものを存在しなかつたことにする文化のほうが一般的だったといえます。その側面から見ると、かつての若者の人間関係も、いまの若者の「優しい関係」とさほど大差なかつたといえるでしょう。

かつて、若者たちの価値観や欲求のありようがいまほど多義的でなかつた時代には、その関心対象も重なりあう部分が大きかつたので、そこに人間関係の安定性も確立されやすく、他者との対立点も顕在化しにくかつたといえます。だから、お互いにコミュニケーションを交わすために、いまほどの c センサイな能力を必要とはしなかつたのです。彼らは、関係性の安定した構造に埋めこまれたまま、それぞれの役割を淡々とこなしていればよかつたのです。

ところが、昨今のようにお互いの関心対象が差異化してくると、以前のような理解可能性は前提とされなくなり逆、お互いの欲求の同質性が失われることによって、むしろ理解不能性のほうがクローズアップされてきます。人間関係を築いていくに際して、かつてより高度なコミュニケーション能力が必要とされるようになってきたのはそのためです。

A 今日若者たちのあいだでコミュニケーションの能力が劣ってきているように見えるとしたら、それは、コミュニケーションの困難さがかつてより目立ってきているからなのです。むしろ、お互いの相違点が顕在化しやすくなっているにもかかわらず、そこから生まれがちな対立をばかすためのテクニックが「優しさの技法」だとすれば、彼らは、かつてより d センレンされたコミュニケーション・スキルを身につけているといえなくもありません。

もつとも、昨今の若者たちも、対立点をばかすことにつねに気をとられているので、お互いの相違を認めあつた上で、それをうまくマネージメントしていく方策を考えるまでに至っていないのは事実でしょう。対話がなかなか成立しないので、相手とのあいだに実際に横たわる相違点や距離感をむしろ見失つて、円滑なコミュニケーションが e ソガイされているということもできます。(良い感じ) という感覚の一体感にもとづいた関係では、構造的な安定性は得られません。

B 同時に彼らは、その内発的な衝動の共有を確認しあうために、つねに直感的なまなざしを研ぎすませているのも事実です。そうしなければ、他者からの自己承認を得られずに、自己の存在自体を支えきれなくなってしまうという切実な事情がそこにあるからです。彼らのその高感度な対人アンテナは、彼らの感じる人間関係の重さと表裏一体の産物なのです。

ところが、② 大人たちが主張するコミュニケーション能力低下論に対して、若者たちは反発を示すどころか、むしろ甘受する傾向さえ見受けられます。自らへの批判を否定できずにいるのは、実際に彼らが身につけているスキル以上に、コミュニケーションの困難度のほうが増しているからでしょう。他者との理解不能性に、身をもつて直面する日々を送っているからでしょう。しかし、コミュニケーションの困難な状況をその能力の低下に起因するものとして、彼らが理解してしまう理由はそれだけではありません。お互いの差異がたんに際立ってきているからではなく、コミュニケーションに対する彼らの期待値もまた急激に上昇しているからなのです。彼らは、社会的な役割をいっさい媒介しない、お互いの内発的な欲求だけでつながる純粋な関係をそこに追い求めようとしています。だから、その理想的な関係性を追い求めながらも、しかしその願望どおりにはいかな現実とのギャップがむしろ強く目立つようになっているのです。

親密圏における子どもたちのふるまいが、「素の自分の表出」から「装った自分の表現」へとシフトしているのに対して、公共圏のそれは、「装った自分の表現」から「素の自分の表出」へと逆にシフトしていると述べました。しかし同時に、内閉的な個性志向の思潮のなかで、彼らは内発的な衝動や生理的な感覚に「本当の自分」の根拠を見出そうとしています。したがって、彼らは、じつは親密圏においても、願望としてはかつて以上に「素の自分を表出」をしたいと思つているのです。彼らにとって、それこそが真実に近く、信頼でき、真正な関係だと思えるからです。

しかし、現実には親密圏で「素の自分の表出」をしてしまうことは、他者との対立を顕在化させやすく、結果として自己承認の欲求を満たす場を危機にさらしてしまうこととなります。欲望の多義化によって、「素の自分」は、かつて以上に他者との対立の危険性をはらむようになっていくからです。だから、その「表出」の願望をあえて抑圧して、「装った自分の表現」をおこなっていかねばならないのです。逆に、自己承認の欲求と抵触しない公共圏においては、「素の自分の表出」がそのままスト

レートにおこなわれることになるのです。

親密圏における「素の自分の表出」への欲望は、かつて以上に高まっています。しかし、その実現は、かつて以上に困難になっています。したがって、「素の自分」をそのまま表出したいという純粹な関係への志向が高まってきた分だけ、現実に関係を営んでいるいまの自分は「本当の自分」ではないという意識もまた余計につのっていきます。「装った自分」を演じてしまっているという意識が強まっていくからです。

現在の若者たちは、「自分らしさ」なるものが人間関係のなかで育まれるものとは思っていません。そのため、<sup>③</sup>周囲の雰囲気に合わせて演技的な態度をとることは、自分をストレートに「表出」していないという意味において、<sup>※1</sup>自己欺瞞にほかならないと感じています。<sup>④</sup>彼らの親密圏での人間関係が、加速度的に重く感じられるようになってきているのはそのためです。純粹な関係性への期待とその現実との<sup>※2</sup>乖離が、ますます激しいものとなってきているからなのです。

(土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち』設問の都合上一部本文を省略した)

※1 自己欺瞞——自分で自分の心をあざむくこと。      ※2 乖離——かけ離れること。

問1 二重傍線部a～eのカタカナを漢字に直せ。楷書で大きく書くこと。

問2 空欄A・Bにあてはまることばとして最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア あるいは    イ しかし    ウ たとえば    エ したがって    オ むしろ

問3 傍線部①「彼らのコミュニケーション環境がそれだけ困難なものへと変質している」とあるが、「困難なもの」となっている「彼らのコミュニケーション環境」とはどのようなものか。六十文字以内で説明せよ。

問4 傍線部②「大人たちが主張するコミュニケーション能力低下論に対して、若者たちは反発を示すどころか、むしろ甘受する傾向さえ見受けられます」とあるが、それはなぜか。その説明として適切なものを、次のア～カのうちから二つ選び、記号で答えよ。

ア 他者とのコミュニケーションが難しくなっている現代においては、自分が身につけているコミュニケーション能力では現状に対し十分に対処できないと考えているから。

イ 他者とのコミュニケーションをとる方法が複雑になっている現代においては、自分がどのコミュニケーションツールを主に用いればよいか上手く判断できずにいるから。

ウ 他者とのコミュニケーションが間接的な形でしかなされない現代においては、自分がどう直接他者とコミュニケーションをとればよいかわからず戸惑っているから。

エ 若者たちは、社会に有用な存在として他者から自分が承認されることを希求しており、そのためにもコミュニケーション能力が今まで以上に必要となることを実感しているから。

オ 若者たちは、社会的な存在としてでなく、自分と親密な関係を結んでくれる他者とだけつながることを希求しており、コミュニケーション能力にさほど重きを置いていないから。

カ 若者たちは、社会的な役割とは無関係の、自らの欲求に共感し自分を承認してくれる関係を希求しており、コミュニケーションに対する期待が最近特に高くなっているから。

問5 傍線部③「周囲の雰囲気に合わせて演技的な態度をとること」とあるが、これと同じ意味の表現を本文中から十字以内で抜き出せ。

問6 傍線部④「彼らの親密圏での人間関係が、加速度的に重く感じられるようになってきている」とあるが、「重く感じられる」とはどういうことか。八十文字以内で説明せよ。

問7 次のやりとりは、生徒たちが右の本文を読んだうえで、「自分らしさ」について話し合ったものである。筆者の考えと同じ考えを述べているものを次のア～エのうちから選び、記号で答えよ。

ア 生徒W——筆者が述べているように、私たち人間は自分がつながりたいたいと思う人との関係が上手く築けているときにだけ、「自分らしさ」を他者に承認されたと実感することができるんじゃないかな。

イ 生徒X——そうかな。自分にとって都合がいい人とだけつながっていい方がいいのはどうかと思うよ。「自分らしさ」というものは様々な他者との関わりのおかげで徐々に作り上げられていくものだと思うけどな。

ウ 生徒Y——確かにそんな面もあると思うけど、インターネットやスマホの影響によって自己存在のあり方が変容させられている以上、それに合わせて「自分らしさ」を自分のなかで作って直しているんだと思うわ。

エ 生徒Z——「自分らしさ」を探すという営みは、いつの時代にもなされていることだからね。時代や環境が変わっても、自己の存在意義を自分のなかで確認することが大切だということとは間違いないよ。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え よ 。

昼の弁当を食べた後も休憩はとらなかった。いつもなら縁側の端を借りて、眠らないまでも横になって休むのだが、その気はなかった。

「さて、なんとしても四日で終わらせるぞ」

A 真新しい畳表を張った畳が三枚 玄関に立てかけてある。藪草の清々しい匂いがする。

午後からの三枚目を終えかけたころ、

「ただいま、おじさん」

清子が帰ってきた。急いで来たらしく、額に汗をにじませている。

「いま、お茶の準備をしますからね」

「ああ、……もう三時になったのかい」

手を休ませずに村井さんは応えた。B 陽光にきらめく畳針を、力強く滑らかに運んでいた。

「おじさん、切りのいいところで休んでくださいな。……お茶が入りましたから」

縁側から清子の声がした。——亡くなった奥さんと同じ言い方だな、と村井さんは思った。

「あたしねえ、いままで何度か、街でおじさんと出会ってるのよ。……おじさんったら、いつも知らん顔でクルマを運転してるんだもの」

村井さんが縁側に腰かけると、清子が言いだした。大人びているようでも、喋り方は中学生だった三年前とあまり変わりはな。——あのときは、毎日のように仕事をしているそばにくっついて、いつまでもお喋りをしていた。

「そいつは、すまなかつた。清子ちゃんが大きくなったんで、お見逸れしちゃったんだよ」

村井さんはお茶をすすりながら言った。事実そのとおりだった。——奥さんの葬儀のときは、この子のセーラー服姿が、いじらしくて、つい貰い泣きしたものだ。

「お料理とか洗濯とか、……家のことは清子ちゃんがやってるのかい？」

「そうなの。パパは会社で忙しいし、弟は朝から晩までサッカーばかりやってるし」

「学校の勉強と一緒に、たいへんだね」

「でも、週に二度は家政婦さんが来てくれるの、近所のおばあさんだけだ。……その日は、ゆっくりお友だちと遊んでくれるの」  
明るくい口調だった。その屈託のなきに釣られて、村井さんはごく自然に言った。

「新しいお母さんが来れば、清子ちゃんも楽になるな。……お父さんも安心だろうし」

急に清子の表情が変わった。強い視線で、質すように見返して、村井さんをたじろがせた。

① おじさん、それ、どういうこと？」

「いや、もしかしたら、そうじゃないかと思ったただだよ。急いで畳表を替えるっていうから、てっきりそうだと……」

「……そう言えば、パパ、とつぜん畳を新しくするって言い出したのよね」

「再婚するなら清子ちゃんが知らないわけないから、わたしの早とちりだったようだな」  
あわてて取りつくるったが、清子は真面目に考え込んでしまったようだった。

——なんという不用意なことを言ってしまったんだろう、と村井さんは悔やんだ。

「さてと、仕事にかかるとするか」

村井さんは、そそくさと腰を上げた。追いかけるように清子が言った。

「おじさんは、パパが再婚すると思う？」

「だからさ、わたしの思い違いだよ」

「でも、もしかしたら本当かもしれないの。このごろパパの様子が、ちょっとおかしいんだもの。……妙に明るくなっちゃって」  
「……妙に明るくかね？」

「ママが死んでからは落ち込んでしまって、ずっと淋しそうだったんだけど、……最近よく笑うし、へたな冗談も言うようになったし」

② 村井さんは、また腰をおろした。清子が溜め息をつきながら、言い継いだ。

「おかしいと思ってたけど、再婚する気だなんて知らなかったわ。……それで、C ママの匂いの残ってる畳を替えてしまおうっていうのね」

「でもね、もしそうだったとしても、お父さんを悪く思ったりしちゃういけないよ」

村井さんは、そつと言った。清子は哀しげに畳のない八畳間へ視線を泳がせていた。

「お父さんには新しい奥さんが必要なんだ。まだ若いんだし、……清子ちゃんたちのためにも母親が必要と考えるのはずなんだから」

それだけ言って、村井さんは再び腰を上げた。

予定通りに仕事が進んで、四日目には二階の六畳間一室を張り替えるだけとなった。D 階下の各室は、藪草の匂い立つ青畳に

変身して、家のながすがすつかり明るくなっていた。

四日目は土曜日で、最後の一疊を終えた午後三時には、この家の主人が帰宅した。

「村井さん、何もありませんが、新しい畳の上で食べていってくださいよ」

寿司の出前を取って、八畳間に招き入れた。四十代半ばの主人とは、その両親が健在なところからの付き合いなので、よく知った間柄だ。

清子もテーブルについてお茶をいれていた。あれ以来、表情に心なしが騒りがうかがえた。

「急ぎの頼みで、無理を聞いてもらって申し訳ありませんでした。思い立ったら、すぐに実行しないと気が済まない。性分なんです。……せつかちだつて女房によく笑われたもんです」

主人が笑いながら、頭を掻いて言った。

「それはもう、長くお付き合いいただいていますんで、お呼びがかかれば何をおいても……」

村井さんは相手を窺うような気持ちになつていた。——急に思い立った理由とは、やはり再婚なのだろう、と勘ぐるころがあった。

「ところで、……なにか近々、おめでたいことでもあるんですかい？」

③ テーブルの向こうで清子が緊張した。

「おめでたいことですか？ ……あるいは、そう考えたほうがいいのかもしれない」

④ 主人が静かな笑いを浮かべながら言った。

「じつは、女房が亡くなってから二年経つて、最近ようやく分かったんです。いつまでも悲しんでいたって仕方ないってね。……こんなに滅入ったままでいたら、子供たちはどうなる。清子が一所懸命に家のことをやってくれてるのに、父親たる者が甘えてはいられないぞと」

そう言いながら清子のほうを見た。清子は目を赤くして父親を見返した。

「そう思うと、家のながが妙に陰気で暗いことに気づいたんです。すると、青い畳に子供たちと寝そべって、はしゃいでいた女房の姿を思い出しましてね。……これはいかん、そうだ畳だ、村井さんに頼んで畳を張り替えよう。みんな新しくして、ぱっと気分を変えよう」

清子の表情が輝いた。父親を見つめる目が笑っていた。村井さんは笑いを誘われて、

「それは、おめでたいことですとも。奥さんだつて、きつと喜んでらっしゃいますよ」

思わず奥の四畳半のほうに目をやった。仏壇の前まで青々とした畳がつつづいていた。

帰りがけ、玄関の外まで送ってきた清子に、村井さんはそつと囁いた。

「悪かったね、大人げなく余計なことを喋って、清子ちゃんの気持ちを傷つけてしまった」

⑤ 清子は、眩しそうな目で村井さんを見上げた。

「ううん、違うわ。……おかげで、パパのことを少しは分かってあげたい気がしてるの」

爽やかな話しぶりが村井さんの胸を打った。

「この三日間ずつと悩んじゃったけど、いつか本当にパパの再婚の話が出てきても、あたしそんなに嫌な顔をしないでいられそう」

村井さんは、潤んできた目を空中へ泳がせながら、

「こんど街で清子ちゃんに会ったら、せつたいに見損なわないよ。……せつたいにな」

大真面目な口調で、そんなことを言った。

(内海隆一郎『表替え』)

問1 二重傍線部a、cの漢字の読みをひらがなで答えよ。

問2 二重傍線部X「いじらしくて」・Y「せつかちだつて」の語句の意味として、最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- |   |   |                  |
|---|---|------------------|
|   | ア | 端正で落ち着いていて       |
|   | イ | 場にはふさわしくなくて      |
| X | ウ | せつなくやるせなくて       |
|   | エ | 弱々しくはかなげで        |
|   | オ | けなげで痛々しくて        |
|   | ア | わがままで周りのことを考えないと |
|   | イ | 積極的で行動力があると      |
|   | ウ | 気が急いで心に余裕がないと    |
|   | エ | ずさんで先の見通しを持ってないと |
|   | オ | 思慮に欠け失敗が多いと      |

問3 傍線部①「おじさん、それ、どういうこと？」とあるが、ここでの清子の心情の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

- ア 日ごろから薄々感づいていたことを指摘され、納得するとともに、その根拠を聞きたいと考えている。
- イ 思いもかけなかった話を聞かされ驚き、その発言の意味するところを明らかにしたいと思つていいる。
- ウ 家族関係に踏み込むようなぶしつけな発言に気分を害され、その感情をそのままぶつけようとしていいる。

工 一番気にかけていたことに話題が振られ興味が湧き、その話をもっと続けてほしいと強く願っている。  
オ たいした根拠もなしに述べられた軽口に憤りを覚え、その発言の軽率さを思い知らせようとしている。

問4 傍線部②「村井さんは、また腰をおろした」とあるが、ここでの村井さんの説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア 自分の早とちりによって話が思いがけない方向に進んでしまい、清子が心を乱したのではないかと不安を覚えていたが、その後の清子の言動から彼女が冷静さを保っていることが確認でき、それならば清子たち家族の今後について助言を与えようと思いは始めている。

イ 自分の何気ない一言が、楽しく他愛もない時間を深刻なものにしてしまったことに後悔の念を抱き、いったんは仕事に戻ろうとしたものの、その後の清子の言動から彼女が必要以上に神経質になつていくことに気づかされ、とりあえずは落ち着かせようとしている。

ウ 自分の不用意な発言から清子にいらぬ心配を与えたことに後ろめたさを覚え、いったんは話を切り上げようとしたものの、その後の清子の言動から自分の憶測が案外的外れではなかったと考え直し、不安を募らせている清子にきちんと向き合おうとしようとしている。

エ 自分の軽率な言動が清子の心を深く傷つけてしまったと考えるといたまれず、もうこれ以上側にはいられないと思つたものの、その後の清子の言動から彼女が実は自分の助けを求めていることがわかり、それならばこの場に残って話を聞くべきだと思ひ直している。

オ 自分の思い違いが清子の父親に対する不信感を招いたと早とちりしてしまい、その罪悪感から一刻も早くその場を立ち去ろうとしたが、その後の清子の言動からその不信感が実はもっと根深いものだったと思ひ知らされ、彼女の言い分を聞いてあげようとしている。

問5 傍線部③「テーブルの向こうで清子が緊張した」とあるが、このときの清子について説明した次の文の空欄に、十五字程度の表現を補え。

「清子は、」  
と思ひ、精神的に張りつめた状態になつていく。

問6 傍線部④「主人が静かな笑いを浮かべながら言った」とあるが、ここでの「主人」の心情の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア 亡き妻への思いを捨て去ることに後ろめたさを覚えながらも、家族のこれからを考えると、そんな個人的感情など無視すべきだとあらためて自分に言い聞かせている。

イ 妻の死から立ち直れず家族のことなど気にもかけていなかった自分のことを自嘲的に振り返りながら、これからは心機一転家族と共に前向きに生きていこうと決意している。

ウ 村井さんの温かさにすがるかたちで今回の自分の選択を何とか肯定的に受け止めようとはしたものの、やはり妻のことは忘れられず、そんな弱い自分を情けなく感じている。

エ 妻の死の悲しみを引きずつたまま生きてきた自分のこれまでを反省するとともに、家族のために前に進もうと心を決めた現在の自分を肯定的に受け容れようとしている。

オ 急な仕事を引き受けてくれただけでなく、自分たち家族のことにまで気をとめてくれる村井さんに感謝するなかで、あらためて人間関係の大切さを思い知らされている。

問7 傍線部⑤「清子は、眩しそうな目で村井さんを見上げた」とあるが、ここでの清子の思いについて八十文字以内で説明せよ。

問8 この文章の表現に関する説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア 傍線部A「真新しい畳表を張った畳が三枚、玄関に立てかけてある」という描写によって、畳職人としての村井さんの仕事に対する真摯さやその専門的技量の高さがより効果的に伝えられている。

イ 傍線部B「陽光にきらめく畳針を、力強く滑らかに運んでいた」という描写からは、母親を失くした清子たちの悲しみを紛らわすためにできる限りのことをしてやりたいという村井さんの熱意が伝わってくる。

ウ 傍線部C「ママの匂いの残ってる畳を替えてしまおう」という言葉を清子に語らせることで、亡くなった母親のことをめぐって父と娘との間にぬぐいきれないわだかまりが存在していることが暗示される。

エ 傍線部D「階下の各室は、蘭草の匂い立つ青畳に変身して、家のなかですっかり明るくなっていった」という描写は、悲しみを乗り越えていこうとする清子たち家族のこれからが活気あるものへと変わっていくことを予感させる。

オ 傍線部E「仏壇の前まで青々とした畳がつづいていた」という描写からは、悲しみを懸命に振り払おうと努めながらも、一方で母親のことを忘れることのできない清子たち家族の抱える葛藤の大きさがうかがえる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

これも今は昔、多田満仲のもとに猛く、悪しき※1 郎等ありけり。物の命を殺すをもて、業とす。野に出で、山に入りて鹿を狩り鳥を取りて、いささかの善根する事なし。ある時出でて狩する間、馬を馳せて鹿追ふ。矢をはげ、弓を引きて、鹿に随ひて走らせて行く道に寺ありけり。その前を過ぐる程に、きと見やりたれば、内に地藏立ち給へり。左の手をもちて弓を取り、右の手して笠を脱ぎて、いささか、帰依の心をいたして馳せ過ぎにけり。

その後いくばくの年を経ずして、病つきて日比よく苦しみ煩ひて、命絶えぬ。冥途に行き向ひて、閻魔の庁に召さぬ。見れば、多くの罪人、罪の軽重に随ひて、打ちせため、罪せらるる事いとみじ。我が一生の罪業を思ひ続けるに、涙落ちてせん方なし。

かかる程に、一人の僧出で来たりて、のたまはく、「汝を助けんと思ふなり。早く故郷に歸りて、罪を懺悔すべし」とのたまふ。僧に問ひ奉りて曰く、「これは誰の人の、かくは仰せらるるぞ」と。僧答へたまはく、「我は汝鹿を追うて寺の前を過ぎしに、寺の中において汝に見えし地藏菩薩なり。汝罪業深重なりといへども、いささか我に帰依の心の起りし功によりて、吾いま汝を助けんとするなり」とのたまふと思ひてよみがへりて後は、殺生を長く断ちて、地藏菩薩につかうまつりけり。

(『宇治拾遺物語』)

- ※1 郎等——家来。
- ※2 業——生活するための仕事。
- ※3 善根——仏教における善い行い。礼拝や読経、布施など。
- ※4 帰依の心——敬い信じる心。
- ※5 冥途——地獄などの暗黒の世界。
- ※6 閻魔の庁——閻魔大王が司る地獄の役所。
- ※7 打ちせため——責め苦しめ。

問1 二重傍線部 a「悪しき」・d「曰く」の漢字の読みをそれぞれ現代かなづかいで答えよ。

問2 二重傍線部 b「ぬ」・c「れ」と同じ意味・用法で使われているものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- |  |   |
|--|---|
| b<br>ア 黒き雲にはかに出で来ぬ。<br>イ 京には見えぬ鳥なれば、<br>ウ 必ず先立ちて死ぬ。<br>エ ゆめ寝ぬ。 | c<br>ア 大将、福原へこそ歸られけれ。<br>イ 目も見えず、ものも言はれず。<br>ウ 悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。<br>エ 今一声呼ばれていらへむ。 |
|--|---|

問3 二重傍線部 e「答へたまはく」のひらがなを現代かなづかいに直せ。

問4 傍線部①「冥途に行き向ひて」とあるが、郎等が冥途に行くことになった理由を説明せよ。

問5 傍線部②「いとみじ」・③「せん方なし」の解釈として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- |   |   |
|---|---|
| ②<br>ア とてもきびしい<br>イ 本当に悲しい<br>ウ たいへん多い<br>エ やはり当然である<br>オ 目の前に迫っている | ③<br>ア 前方が見えない<br>イ 何とかしたい<br>ウ 元に戻らない<br>エ 何とも言えない<br>オ どうしようもない |
|---|---|

問6 傍線部④「汝を助けんと思ふなり」とあるが、誰が、なぜ助けようと思ったのか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

- ア 地藏菩薩がいる寺の住職だった僧が、郎等が以前に受動的ではあるが仏教への信仰心を持ったことを評価したから。
- イ 僧の身なりをした地藏菩薩が、郎等に最近かすかにだが地藏への罪を反省する気持ちは生じたことを評価したから。
- ウ 僧と地藏菩薩が二人で相談して、郎等に今更やつとはあるが閻魔大王に服従する態度が見えたことを評価したから。
- エ 地藏菩薩がいる寺の住職だった僧が、郎等がかつて急いでいる最中に一瞬だが地藏を見つめたことを評価したから。
- オ 僧の身なりをした地藏菩薩が、郎等が生前にわずかではあるが菩薩を敬い信じる心を起こしたことを評価したから。